

6 独居ならびに高齢者のみの夫婦世帯の社会関連性と健康状態との関係

○菅野 夏子（関西福祉大学看護学部）、中原 由佳（六甲アイランド病院）、
古川 由佳子（神戸市立医療センター西市民病院）、
藤井 可苗（関西福祉大学看護学部）、桑崎 靖子（山科区役所保健部）

I. はじめに

独居ならびに高齢者のみの夫婦世帯の社会とのつながり（社会関連性）と自己の健康状態の認識を明らかにする目的で行う。

II. 研究方法

1. 対象と方法

1) 対象：

対象はC町に住んでいる、独居老人 11 世帯と高齢者夫婦 7 世帯の計 18 世帯、25 名である。

2) 調査項目および調査方法：

家庭訪問による面接調査を行った。研究の同意が得られたものに対して、インタビュー調査を実施した。調査項目は、①健康に関すること、②社会とのつながりについてであり、半構造化面接を行った。インタビューの内容は I C レコーダーに録音し、逐語録を作成、意味内容が共通するものをまとめ、カテゴリー化を行った。調査期間は 2009 年 8 月から 9 月である。

2. 倫理的配慮

C町に調査協力の依頼を行い、インタビューの許可を得た。対象者には、書面および口頭で研究の趣旨・方法、データの秘密性と匿名性の確保、研究拒否や中断による不利益が無いことを説明し、同意が得られたもののみを分析対象とした。なお、本研究は、関西福祉大学地域看護学領域倫理審査会の承認を得て実施した。

III. 結果

男性 4 名、女性 7 名の計 11 名 (44%) を分析対象とした。年齢は 67～86 歳であり、平均年齢は 77 歳であった。世帯形態として独居老人世帯が 8 世帯、高齢者夫婦世帯が 2 世帯であった。インタビュー内容を分析した結果、「健康に関すること」「社会とのつながり」に関するデータは 278 抽出された。社会関連性については【人との関わりについて】【社会活動について】【社会資源について】という内容が抽出された。健康状態については【健康に関すること】【対象者が感じていること】という内容が抽出された。

IV. 結論

①対象の高齢者は近隣住民とのかかわりが重要であることを認識し、ボランティア活動の参加など積極的な社会とのつながりを持つことを重視していた。②主観的健康感を低くとらえ、今後の生活に不安を感じていることが明らかとなった。